Queer Theory から見た「スポーツとジェンダー研究」再考

○　松田恵示（東京学芸大学）

キーワード：クィアー　アイデンティティ　他性

１．はじめに

本報告の目的は、アメリカにおけるセクシャリティ研究では大きな潮流のひとつとなっている<Queer Theory>の視点から、これまでのスポーツとジェンダーに関わる研究の傾向について、批判的な検討を加えることにある。

<Queer　Theory>とは、統一性のある理論というよりは、固定化をさけようとする志向性をもった、ジェンダー・スタディーズ、セクシャリティ・スタディーズの総称であると考えてよいと思われる。そもそも「変態」を示す言葉である Queer　は、セクシャル・マイノリティを包括的に表現する語として使用されるのが一般的である。

例えば伊野は、ゲイ・スタディーズの持つ特徴を次の３点から捉えている。第１に、「ゲイ」という当事者性を強調するあまり、「単一のセクシャルアイデンティティ」という罠にはまってしまっていること。第２に、「単一のアイデンティティ」という罠にはまった結果、「同性愛者」というカテゴリーを逆に分節化してしまい、セクシャリティの持つ連続性を裁断してしまったこと。第３に、結局のところこのような研究志向が、性別とセクシャリティの共犯関係を不問いにしてしまい、性別を所与のものとして受け止めてしまっていること、である。<Queer　Theory>は、こうしたゲイ・スタディーズの持つ限界を乗り越えようとして広がるものであるだけに、「正常な、正統的な、支配的なものとぶつかるものならなんでも、定義上クイアーである。クイアーは、何か特定のものを指し示すとは限らない。それは本質なきアイデンティティである」というハルプリンの指摘は的を得たものであろう。

このような志向を持つ<Queer　Theory>の視点から、これまでのスポーツとジェンダーに関わる研究について検討を加えることが、本報告のねらいである。

２．アイデンティティをめぐって

「ジェンダー表現の背後にジェンダーアイデンティティが存在するわけではない。そのアイデンティティは『結果』として語られる、まさしくその表現によってパフォーマティブに構築されるのだ」と語るバトラーは、従来のジェンダー・スタディーズ、セクシャリティ・スタディーズでは、「女性」という実存的なアイデンティティを仮定し、このアイデンティティこそが「主体」を構築すると考えてきたことに警笛を鳴らしている。

<Queer　Theory>の特性のひとつは、バトラーと立場を同じくする、この「アイデンティティ論」に対する独特の捉え方がある。アイデンティティ・ポリティクスとして、ジェンダーの問題をとらえることは、常に構築されたアイデンティティが集団の表象として使われることを意味している。しかし、このようなアイデンティティのあり方は、かならず、当事者ではない「他性」をもった存在を析出し排除してしまう。ジェンダーという用語は、本来、生物学的な雄性／雌性に対して、社会や文化によって作られた男性性／女性性を説明するために使われた。しかしジェンダーという眼差しの中にこそ，アイデンティティという媒介物を通して、こうした「男」と「女」という記号を単数化してしまう契機を実は内在させているのではないか。さらに言えば，それは言葉によって編まれた「主体」というものの過信といった事態をもともなえているのではないか。

ジェンダーとスポーツ研究を、こうした<Queer Theory>の視点から再考してみた場合、検討されなければならないことのひとつは、「アイデンティティ論に対する無自覚性」である。当日の報告では、さらにこの点に詳しく考察を加えてみたい。

参考文献

伊野真一、「Queer Studies の射程」『クィアスタディーズ 97』七つ森書館、1997
ハルプリン・デイヴィッド(村山敏勝訳)、「聖フーコー　ゲイの聖人伝に向けて」太田出版、1997
砂川秀樹、「日本のゲイ/レズビアン・スタディーズ」『QUEER JAPANvol.1』、勁草書房、1999